

平成6年度第一回  
諮問・調整委員会議事録  
(案)

日時： 1994年6月10日(金) 13:30～17:00

場所： 原研本部第2会議室

出席者： 神田幸則(九大)、五十嵐信一(NEDAC)、松延広幸(住原)、大竹巖  
(データ工学)、中澤正治(東大)、菊池康之(原研)、水本元治(原研)

配布資料1： 諮問・調整委員会議事録(案)

2： 諮問・調整委員会報告書(案)(神田委員長)

3： 諮問・調整委員会報告書(案)へのコメント-1(木村委員)

4： 諮問・調整委員会報告書(案)へのコメント-2(中澤委員)

5： JENDL-3.2の普及方策(菊池氏)

議事

1. 前回の議事録(案)を承認した。

2. 諮問・調整委員会答申案について

2.1 神田氏が諮問調整委員会報告書(案)(各委員に送付済み)の説明を行い、その後、第4期諮問調整委員会(木村逸郎委員長)答申案(平成3年4月5日付け)の内容の確認を行った。

2.2 今回の報告書(案)の議論に先立ち、菊池氏が核データ国際会議(5月に米国ガトリンバーグで開催)核データの現状・将来に関する見方を、円卓会議(Speaker: B. Kuzuminov(ロシア)、A. B. Smith(米国)、J. Rowlands(英国)、菊池(日本)の各氏、モデレーターG. Reffo(伊))での議論を主体に報告した。(原子力学会誌に共同で投稿予定)

2.3 報告書(案)に対する討論

資料3および資料4のコメント等を参考に報告書案について討論を行った。議論された主な内容は以下の通り。

○現状認識

・これまでの諮問調整委員会の議論では悲観的な見方が強かったことは否定できない。しかし、報告書(案)が、核データの将来に対してペシミステックな調子

になり過ぎるているではないか。

- ・核融合炉での放射化断面積データのニーズが再確認されていること、消滅処理関連の高エネルギーデータやアクチノイドデータなどへの強う要望などを報告書の中に盛り込むべきではないか。

- ・高速増殖炉や軽水炉からの断面積データへの需要については、今後JENDL-3.2を越える新たな評価データにたいする急激な要求が見込まれることはないであろう、というのが一般的な認識である。

#### ○答申案の内容の基本的な方針について

- ・核分裂炉関連の核データについては、JENDL-3.2の維持・管理（不具合の修正、小幅なアップデート）を行うと同時に、核データの一般ユーザーへの普及に重点を置いた活動を行う。

- ・核データの知識や手法を身につけた核データの専門家が、データを必要としている他分野の作業に参加し、ユーザーの立場で核データを活用する。（核データのコンサルティング活動）。

- ・新たな核データが要求させる分野として、核融合（放射化、材料選択のためのデータ）と消滅処理（アクチノイド、高エネルギーデータ）等を主体に活動を活性化させる。

- ・核データの分野を基礎科学的な視点からとらえる。例えば、低速中性子源による基礎研究、中性子や荷電粒子入射反応による天体核物理などへの領域拡大を図る。

#### ○国際協力

- ・従来の核データ4センターネットワークを前提とした国際的な協力の枠組みが崩れようとしている（①米国でのBNLの活動の縮小あるいは停止、②ソ連の解体によるObninskのセンターとしての機能の低下、③NEAとIAEAとの一体化の動き（IAEAとNEAとの話し合いは今後の課題）こと等を踏まえて新たな協力の枠組みを模索する必要がある。

#### 2.4 中間報告の作成について

以上議論されたように、①第5期諮問・調整委員会は発足が遅れたこともあり議論が充分行われていない（実質1年間の議論）。②JENDL-3.2の最終版が公開されたばかりであり、ユーザーと評価側とのアウトプット、フィードバックの交換が不十分である。（例として、遮蔽計算の結果が実験と非常に良く合うことが最近分かってきた）。③国際的情勢が流動的である。

このような点を考慮して、本年度は、“委員会の報告を最終答申とはせず中間報告とする。”ことで合意された。